

新潟市内の雪の販売について

若崎 敦朗

平成十八年に「新潟の舟運」展を開催しました。この企画展の中で、信濃川阿賀野川をはじめとした河川や潟を経由して、港町新潟と上流域の町・村との間で往き来していた品物の一つとして、与板や長岡から新潟に雪が運ばれたことを紹介しました。特別の鋸で切り出した圧縮された雪は、行形亭・鍋茶屋などの料亭や新潟医学専門学校の付属病院などで、食材の冷蔵用や氷嚢用(ひようろう)に使用されていました。その後、かつて新潟市内で雪の卸販売業を営んでいた店の方から、「ご自身が子供だった昭和前期の様子について、お話を伺うことができました。本稿では、この聞き取りや保存された雪の貯蔵する三間(約五・四メートル)四方の雪蔵(貯蔵施設)があり、厚さ二〇センチ程の外壁が外からの熱を遮断するようになっていました。雪は雪蔵に入れる前に塩水をかけて、たこづいて締め固めました。床におがくずを敷き詰め、その上に雪を積み上げました。さらに周囲もおがくずで囲んで、できるだけ雪が融けないように工夫しました。雪を得意先に届ける時には、雪を六〇センチ角の塊に切り分け、竹を編んだ敷物の上に載せ、筵で覆い、大八車などに載せて運びました。製氷技術が発達すると、雪は氷に替わり、雪を取り扱わなくなりました。以上がお聞きした内容です。

ほかに現当主の父親の回想文があり、それによれば、はじめ新津や袋津が雪の仕入れ先でしたが、その後地蔵堂・白根・与板からも仕入れるようになりました。販売先には、前記以外に魚のセリ場があり、町なかで雪を販売していた女衆にも売りました。市内では雪佐商店や雪権の他に雪組合が雪の卸売りをしていました。

今回の聞き取りでは、雪佐商店の雪の仕入れ先や貯蔵方法、販売先などが確認できました。また、保存しておられた資料から、開業年や地蔵堂から仕入れていたことなども分かりました。しかし、わかったことは明治三十年代から昭和前期の限られた時期の、新潟市内で一端に過ぎません。新潟県は明治十二(一八七九)年に「氷雪販売取締規則」を制定し、雪の販売を認可制にしています。そ



明治18年 長岡の氷室の雪を新潟港に運び出す図 2代目片山翠谷画(個人蔵)



雪は一年中店に運ばれていました。最盛期の七月には毎日三、四艘の船が雪を運んできました。店の敷地には雪を貯蔵する三間(約五・四メートル)四方の雪蔵(貯蔵施設)があり、厚さ二〇センチ程の外壁が外からの熱を遮断するようになっていました。雪は雪蔵に入れる前に塩水をかけて、たこづいて締め固めました。床におがくずを敷き詰め、その上に雪を積み上げました。さらに周囲もおがくずで囲んで、できるだけ雪が融けないよ

西安友好の旅

去る五月十八日の西安市博物院の開館に当り、西安市の招待を受け、和田副市長、甘粕館長、田代副館長、関本国際課主査の四名の代表団が訪中しました。三日間の滞在で達成した日程を略記します。

■五月十六日

- 名古屋セントレア空港発。上海経由で十三時五十分西安空港着。外事弁公室と文物局の幹部各名の出迎えと聞いていたのに、二〇〇四年の長安文物秘宝展で協力した西安市文物保護考古所所長孫福喜氏等旧知の四人と我々の世話をするため留学先の京都から呼びもどされた若手二人、計六人の熱烈歓迎を受けびつくり。
- 大雁塔視察。
- 博物院開館を記念して中国全土の博物館関係者が集まった「全国十大文物精選評選会」の晩餐会。
- 西安秦腔劇院の歌舞劇観賞。

■五月十七日

- 明の西安城の南門と城壁を視察。
- 西安碑林博物館視察。
- 十一時三十分、西安曲江惠賓苑賓館に副市長李秋実女士を表慶。続いて両館の「友好・提携」の議定書に、両副市長の立合いで、甘粕館長、院長代理向徳文物局副局長

が調印。

- 李副市長主催の招宴。

- 前漢・二代皇帝恵帝の陽陵地下博物館視察。今回初めて視察、見ごたえがあった。

- 市政府の大招宴。

- 曲江大唐芙蓉苑の水上史劇ショー見物。

■五月十八日

- 博物院オープン記念式典。和田副市長テープカットに参加。
- 博物院の展示視察。
- 記念レセプション。市長等高官に挨拶。

- 秦始皇帝陵丘馬俑坑視察。

- 外事弁公室の招宴。
- 五月十九日 早朝西安空港へ。十六時成田空港着。

(あまかす けん 館長)



西安市博物院との友好・提携の調印

収蔵資料紹介

糸車

糸車は糸紡ぎに使う道具です。繊維を細く引き出して、撚りをかけて糸にすることを糸紡ぎといいますが、新潟市域では主に綿糸を紡ぐのに使われました。

糸紡ぎの手順は、まず植物の綿花から繊維を引き出して、糸車の先端(ツム)にひっかけます。次に糸車を回して、繊維に撚りをかけながら細長く引き出していきます。繊維に十分撚りをかけたものが糸になります。

糸車は、江戸時代には新潟町の主な産物の一つに数えられ、新潟湊から新潟近在や村上、さらに遠く南部まで船で運ばれ、売られました。当時の新潟湊は、内水面交通を経て新潟平野や会津をはじめ、日本海沿岸各地の産物が集散し、それらの加工・流通によつて栄えていました。糸車も、材料となる竹は佐渡から、木材は近在から買い入れて、新潟町で加工されていたようです。糸車の製作が盛んだっ

たのは、物資集散と加工貿易という湊町の経済活動に加え、後背地の蒲原平野で木綿布の生産が盛んだったためです。蒲原平野の村々では家族の着物を自家生産していました。綿から糸を紡ぎ、木綿を織って木綿の生活着、仕事着を仕立てました。

幕末には蒲原平野の各在郷町で、産業として木綿織が盛んになります。その生産を支えていたのは、木綿織に関わる様々な職種の人々でした。副業的に糸紡ぎを行う糸引きもそうした職の一つです。

(森 行人 学芸員)

